

## 大会参加報告 (大会後ツアー)

白野 学・佐々木正己

### オオミツバチと昆虫食のタイ

第5回アジア養蜂研究会とタイ北部オオミツバチツアーに参加する今回の旅は、いきなり飛行機が4時間も遅れるというハプニングから始まった。チェンマイのロータスホテルに到着したころには夜中になっており、外国に行くのが初めての自分は非常に不安になった。

翌日は会議に参加したが、自分は英語が非常に苦手であり、さらにはじめて参加する学会の雰囲気緊張し、はじめは何を言っているのかわからなかった。しばらくしてなれてきたのか、スライドを見ながら発表を聞いていると、少しずつわかるようになってきた。自分にとって学会の雰囲気が、何よりも新鮮に感じた。同時開催のビーワールドエキスポ2000はミツバチ科学ブースの店番と会議への参加を交互にやっていたのであまりまわれなかったが、いろいろなミツバチグッズやタイのハチミツなどが展示されていて、なかなか面白かった。

会議の途中で、タイの養蜂場やオオミツバチの巣を見るツアーに参加し、まずチェンマイ大学の構内につくられているオオミツバチの巣を見た。1m近い一枚の巣板にオオミツバチがびっしりとついている巣は、実際に間近で見ると大きくて迫力があり、感想は、「すごい」の一言だった。タイの養蜂場では、コミツバチやハリナシバチを見ることができ、コミツバチの巣を見ているときにタイのスズメバチも見ることができた。タイのスズメバチは日本のツマグロスズメバチに近く腹部が2色に分かれている。これはぜひ標本にと捕獲を試みたが後一步のところまで逃がしてしまった。まだチャンスがある

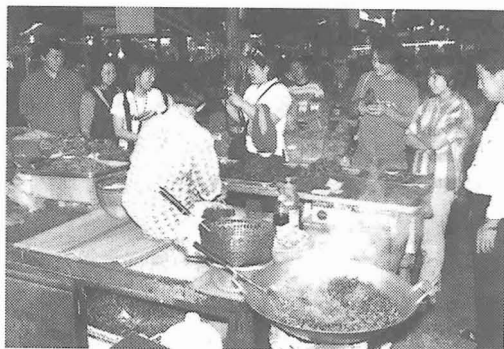


図1 ランパンの昆虫食屋台を見学

と、その場はあきらめたが、スズメバチ捕獲のチャンスは後にも先にもこの一回だけであり、非常に心残りであった。

会議終了後に参加したオオミツバチツアーでは、オオミツバチの巣が十数個もついている木を見ることができ、その巣の数と蜂の多さに圧倒されてしまった。採集を試みた際、先生が刺されるといったアクシデントも起こったがここで採集したオオミツバチは今でも大事に飾ってある。

自分は今回、学会とオオミツバチのほかにタイ料理も楽しみにしていた。タイについた日の晩ご飯はホテルの外に食べにいったが、そこで食べたソムタムタイ(青パパイヤのサラダ)が非常に辛く、タイと日本の料理の味付けの違いを痛烈に味わった。また、タイ料理ではナンプラー(魚醤)がよく使われていた。日本で隠し味に醤油を入れるのとそれほど変わらない感覚なのだろう。しかしこのナンプラー、一種独特の香りがあり、自分は大丈夫だったが、いっしょに参加した朝賀君は苦手らしくかなり苦戦していた。

そして極めつけは昆虫食である。日本でもイナゴや蜂の子といった昆虫食はあるが、タイはその種類がすごい。オオミツバチツアー初日にいったランパンの昆虫食屋台(図1)には、カイコ、タガメ、コオロギなどたくさんの昆虫が山のようにつまれており、その日の夕食に昆虫が出たのはいうまでもない。見た目はかなりグロテスクな昆虫のから揚げ。カイコはちょっと匂いがきつかったが、タガメとコオロギはさくさくとして、ビールによくあい、意外とおい

しかった。

今回の旅は、移動も多かったが、そのことで多くの場所を訪れ、多くのことを体験することができた。オオミツバチをはじめとするタイの動植物の観察や会議への参加は、自分にとって、一生思い出に残る経験であり、もう一度タイに行く機会があれば、今回の旅行で得た経験をいかした旅をしたい。(白野)

### 北ボルネオの野生ミツバチに会う

大会後、吉田と佐々木はボルネオに立ち寄り、当地のミツバチ事情を垣間見ることができた。お世話になったのはテノムの農業試験場のTingek博士で、すばらしい経験をさせてもらうことになったが、テノムまではコタキナバルの飛行場から車でかなりの距離を走り、山を越えて入らなければならない。途中幸運だったのは、山道から一時間ばかりジャングルの中を沢に下ったところでラフレシアの花を見られたことである。ラフレシアには何種類かが知られているが、現地のもは直径が40cm弱の種類である。サラワク州の直径1mにもなる巨大なものに比べれば小さいが、幼い頃から本であこがれてきたものを目の当たりにしたときの感激はちょっと表現しにくいもので、汗びっしょりの山道の苦労も報われて余りあるものだった(図2)。ブドウ科の巨大なツルに地中で寄生している植物で、後承知のように、緑色の葉などは一切ない。観察できた花は開花後すでに4-5日経っており、強烈な匂いにさそわれてハエや時としてミツバチが集まってくる時期は過ぎてしま

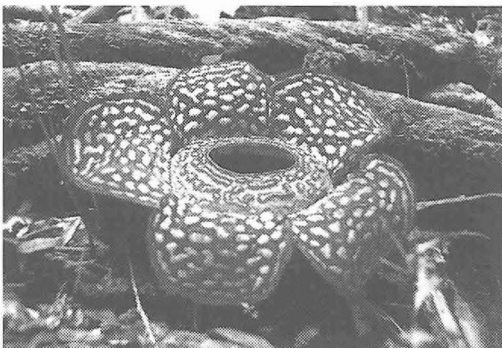


図2 あこがれのラフレシア

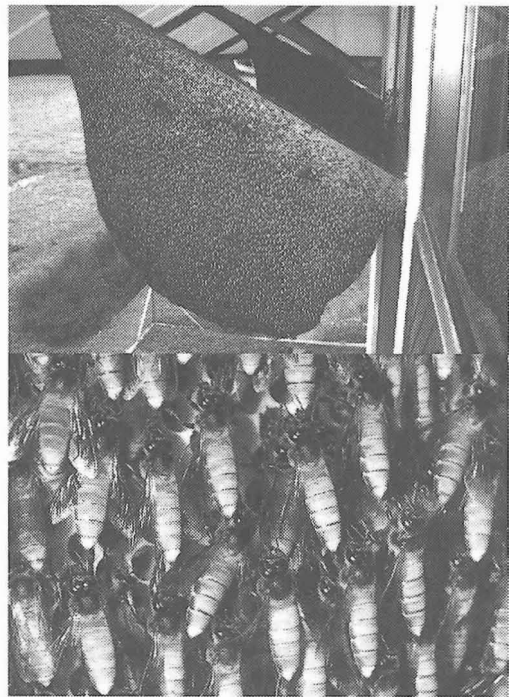


図3 梁に並んだオオミツバチの巣と巣板上の働き蜂のカーテン

っていたが、小さなコオロギ類が花の中に何匹も訪れていた。まだシーズンの初め、おそらくこの年最初の花と思われ、子供の頭ほどもある蕾もいくつか見ることができた。

テノムの街が一望出来る山の上のホテル(といってもホテルらしいホテルはこれくらい)に宿をとり、翌朝試験場のKalituさんにジープで迎えにきてもらう。森林伐採のためか、泥で真っ茶色に濁った川を渡り、山懐の試験場につくとTingek博士が待っていてくれた。場内の一角にある新設のミツバチ博物館はまだ建物が建っているだけで、中は完備されていないが、度肝を抜かれた。なんと建物の梁にいくつもの野生のオオミツバチが営巣しているのである(図3)。観察にベストの位置とはいえなかったが、2階の窓から身を乗り出して、接写写真もとることができた。

ここでぜひ実験してみたいと考えていたのが、当地のトウヨウミツバチとサバミツバチがスズメバチ類に対し、はたして蜂球を作るか、その場合何度くらいまで温度を上げるか、であった。1990年にマレーシア農科大学のトウヨ

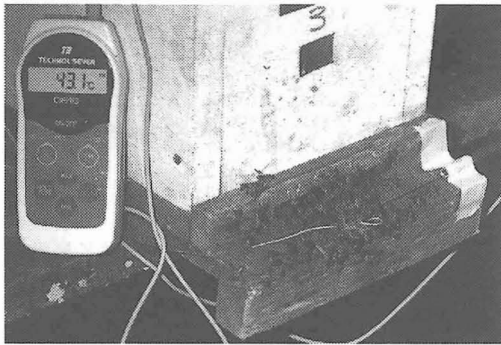


図4 蜂球の温度は43.1℃を示している

ウミツバチで予備実験したときには、蜂球はできたが刺針行動をする蜂も見られ、温度も日本(北方)産のものに比べて低いように思われた。そこで今回は精度の高いサーミスター型温度計を持参しての訪問であった。あらかじめ捕獲したスズメバチの胸部と腹部の間を糸で縛って逃げないようにし、これを巣門のところに提示する。そのときのガード蜂の行動、とくに蜂球をつくるか、刺すか、発熱部の飛翔筋への酸素供給運動がみられるか、それに蜂球内の温度がどこまで上がるか、をみるのである。結果の詳細については別の機会に譲りたいが、結論的には両種ともスズメバチを殺すにたる発熱をしようことがわかった(図4)。

サバミツバチは1986年に *Apis vechiti* として新種発表され、その後 *Apis koschevnikovi* とされた赤い(実際には濃い橙色の)ミツバチである。佐々木は初めてであったので、この実験は感激ひとしおであった。吉田は、請われて本種にも有効と思われる人工授精の勘所を伝授する一幕もあった。

実験施設の回りはすべて小さな堀が巡らせて

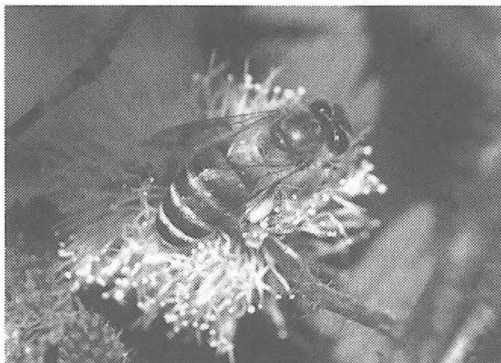


図5 ミモザの花に来たキナバルヤマミツバチ

あり、タップミノウをもうすこしタナゴ型に近くしたような小魚が泳がせてあった。堀はアリが建物に侵入するのを防ぐためであり、小魚はもちろん発生する蚊のボウフラを食べさせるためである。こんなところにも熱帯の研究所らしい雰囲気を実感された。ジャングルは「昼なお暗い」というほどではないが、場内にも結構森があって車で案内してもらおう途中、オオミツバチの巨木のところに連れていってもらった。その木は谷あいからすーっと高く伸びた1本の木で、オオミツバチの巣がぶら下がっているとところまでは何と地上から45mとのことであった。

短い滞在はあっという間に過ぎ、帰路につかねばならなかったが、帰りは Tingek 博士が同行してくださり、今ひとつ嬉しい体験ができた。途中の山道の標高約2000m地点の花上で、数匹のキナバルヤマミツバチ *Apis nuluensis* を採集することができたことである。これは外見はニホンミツバチに酷似しており、慣れないと当地のトウヨウミツバチ *Apis cerana indica* との区別も難しい。巣がどこにあるのかはもちろんわからなかったが、会えただけでも幸せであった。ミモザの花に来ているところ(図5)、帰化植物であろうと思われる黄色のキク科の花に来ているところの写真撮影にも成功した。

山道の食堂で昼を食べていると、森に雲がかかってはまた晴れる。世界の動植物愛好家が一度は行きたいと思うキナバル山にも連なる山塊であり、ウツボカズラなどの植物も期待していたが、これは無理な注文であった。この一帯の森は人の手が入っていない virgin forest とのことであったが、エルニーニョの関係でボルネオも雨が降らず、特に大半を占める伐採地ではあちこちで厳しい状況とのことであった。ボルネオの木は一部では植林も進んではいるが、まだまだ違法な伐採もみられるようで、それらの木材の大部分が日本に持ち出されていることを考えると、真っ茶色な川の水をみるにつけ、複雑な思いにもかられた。しかし忘れ得ない旅であった。(佐々木)